

山と博物館

第51巻 第5号 2006年5月25日

市立大町山岳博物館



巣作りをしているサンショウクイのツガイ

撮影 長澤修介

サンショウクイ

清水博文

平成十八年五月十四日に鷹狩山で開催された「小鳥の声を聞く会」（市立大町山岳博物館主催、今回で二六回を数える）では、三種類の野鳥の鳴き声や姿を観察でき、サンショウクイ、エナガ、メジロ、ホオジロと計四種の野鳥の営巣を確認することができました。

サンショウクイ（サンショウクイ科）は、冬は東南アジア等において、春に日本に渡ってきて繁殖し、秋になるとまた暖かい国に帰っていく夏鳥です。長野県のレッドデータブックでは、オオタカやライチョウと並んで絶滅危惧Ⅱ類（VU）「長野県内において絶滅の危険が増大している種」に位置付けられています。

大町市では比較的目的にする機会が多く、鷹狩山でも毎年観察されています。

また、サンショウクイという名前は、「サンショは小粒でもピリリと辛い」ということわざがありますが、ピリリ、ピリリ……という鳴き声からつけられたと言われています。

サンショウクイの営巣場所は、車道に面した高木の枝が分岐した所に作られていました。

巣は木の枝の色とそっくりで、人間の目からはどこにも巣があるのかわからないくらいです。巣の構造は、お椀のような形で、一般にイメージする鳥の巣（いわゆる木の枝などを組み合わせた皿状の巣）とはかなり異なっており、巣の内部は細い草の茎や根などで出来ていますが、巣の外部はウメノキゴケをクモの糸で貼り付けて造られています。

巣材の色が保護色となり、木のこぶの様にしか見えないのです。

ニホンカモシカを題材とした 教育プログラムの開発に取り組む

宮野典夫

はじめに

東京コミュニケーションアート専門学校の学生を中心とした北アルプス森のカモシカ舎というグループが、二〇〇二年から大町市平高瀬入の山林でニホンカモシカを観察し、そこから導き出されたデータをもとに、子供向けの学習プログラムを開発し、実践している。

これらを進めるにあたって、ニホンカモシカを観察し実際に見たものや体感したものを大切に考えて、北アルプス山麓のニホンカモシカならではの学習プログラムを創作することを考えた。筆者は彼らの調査やイベントのいくつかを同行させてもらったので、ここにその一部を紹介したい。

調査・イベントの場所

調査の範囲は高瀬川支流の渋沢を中心とした約三〇〇ヘクタールの民有林である。北および東向きの斜面が多い二次林で、カラマツ、ミズナラなどの樹種で構成されている山林である。

イベントの実施場所は主に林道あるいは林道の脇の尾根、沢などで行なった。

調査・イベントの目標

専門学校の学生が年毎に小グループを形成し、各グループが当該地域に生息するニホンカモシカについて知りたいことをいくつか取り上げて、その中から観察や調査の内容を絞

り込んだ。

イベントはニホンカモシカを調査すること



- ①足跡：爪の向きで進んだ方向がわかる。この場合は上が進行方向
- ②食痕：芽に毛が付着
- ③フン
- ④角とぎ痕
- ⑤休息場：座休息と立休息がある。写真は座り休息

の模擬体験などを通して、ニホンカモシカの生態やそれを取り巻く自然に興味を持ってもらうことを目的とした。

二〇〇二～二〇〇三年の活動

調査は、主に足跡、食痕、フン、角とぎ痕、休息場を地図上にプロットして、ツガイで生

活していることを想定したうえで行動域を推定した。

実際に観察できた生活痕と推定した行動域を示した(図1)が、連続して足跡が追えなかったことなどから、行動域の確定が難しくなった。しかしA区域では親子、B区域では一頭、C区域では親子と単独行動をとる一

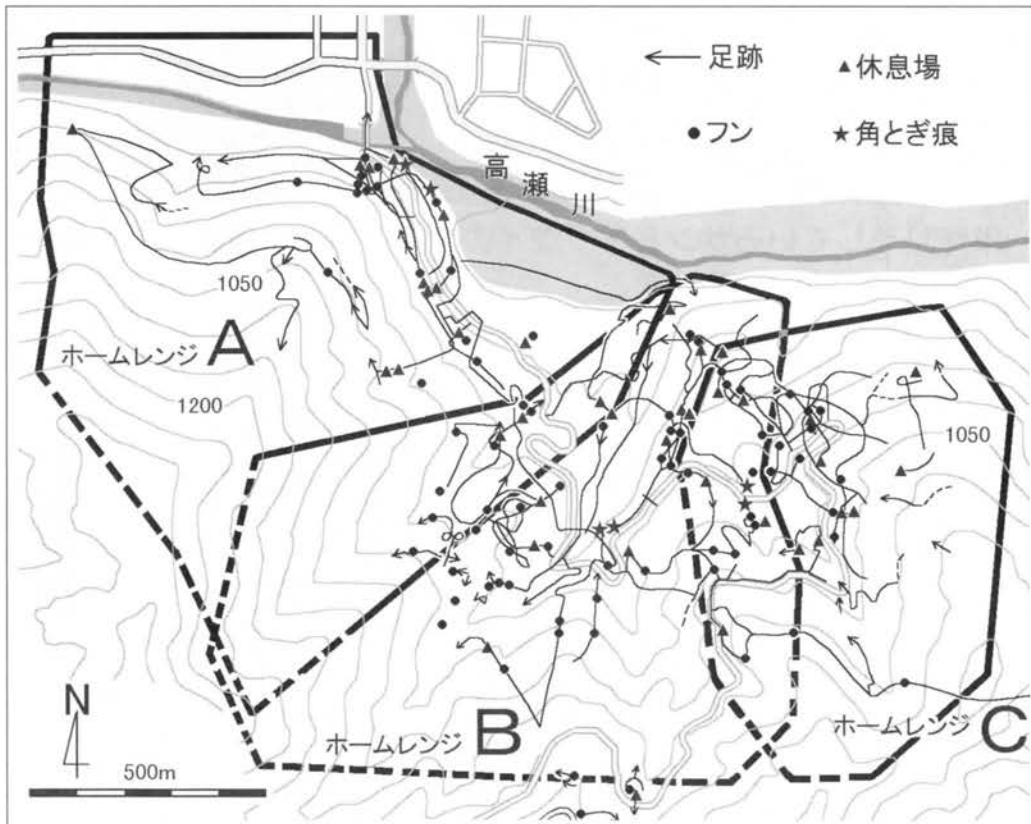


図1 2002～2003年の生活痕と推定した行動域

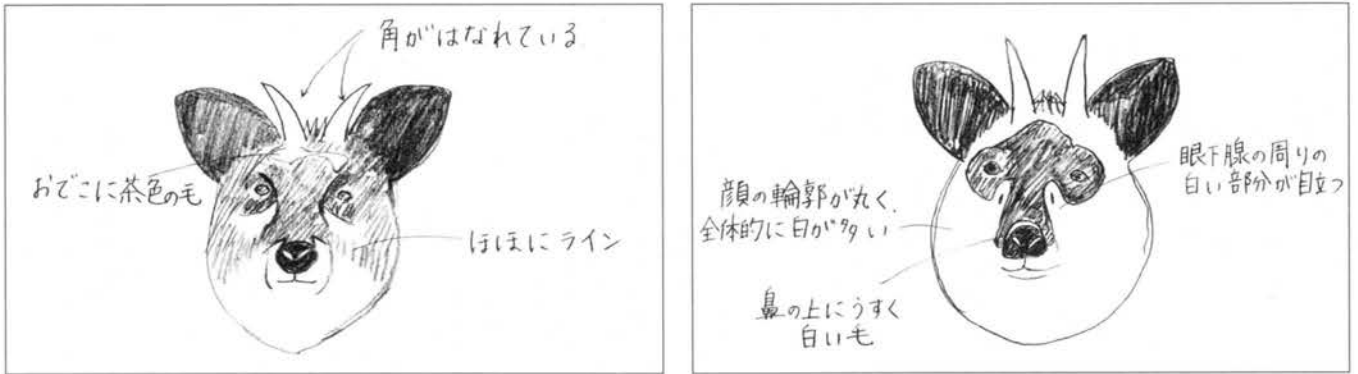


図2 個体識別カードの一例

個体が確認できた。
 イベントは調査模擬体験型とし、雪面上で実際の足跡を追跡しながら、角とき跡や休息場の説明などに発展させた。また、ニホンカモシカの生態を楽しく理解するための工夫として独自に製作したカルタ（カモシカと称して実施）と、生態をまとめた紙芝居（カモシカと称して実施）も好評であった。

二〇〇三～二〇〇四年の活動

ニホンカモシカの個体識別をすることを重点に直接観察の機会を多く持ち、写真撮影にも心がけた。個体識別の手段としての写真はスタッフが共通認識をする上で、非常に有効であった。また、スタッフ以外の人にも個体差がわかるようなカードの作成をおこない、観察時やイベント時に活用した。調査区域内では九個体の個体識別が可能になった。

イベントは調査模擬体験型とした。イベントの開催エリアに適している区域内の五個体を対象にして、実際にニホンカモシカの観察ができるポイントを設定し、識別カードを参考にしながらの個体識別を実施した。

実際にニホンカモシカに遭遇できたグループと会えなかったグループが生じたが、その後のイベントでニホンカモシカに変装したスタッフや、ニホンカモシカになりきって様々な行動を示し、実際にニホンカモシカを見ることのできなかった子供へのフォローもできていた。イベントの最後に自分だけのニホンカモシカのお面を作り、一頭ずつ違うことの理解を実感できる工夫もあった。

二〇〇四～二〇〇五年の活動

約二キロメートルの尾根と約一・五キロメートルの沢を対象に、二〇〇四年の二月と三月に調査

した結果、休息場は尾根に多く見られ、沢ではみつけることができなかった。休息する場合には、見晴らしが良く、背後に岩や大きな木などがあると、より落ち着いた場所を好むので、沢より尾根を選ぶと思われる。ニホンカモシカの餌となる植物は、沢筋の方が豊かなのが一般的であるので、食痕は沢に多く、足跡もあちこち歩き回った痕跡があった。それに比べ尾根筋は昇り降りの足跡より尾根を横切る方が多く見られた。

イベントは尾根と沢にみたてた場所にあらかじめコースを作り、尾根での休息、沢での食事といった場面を想定して、各場面で解説しながらコース上を歩く形式で行なった。

二〇〇五～二〇〇六年の活動

ニホンカモシカの姿を目視し、その行動を観察し記録をとった。二〇〇六年三月一五日には七時四〇分から一八時五分までの一時間三〇分余りの連続追跡をすることができた。現在そのデータを整理しているところである。これらの記録をもとにしてニホンカモシカの生活を基調とした、絵本の作成に取り組んでいる。

結びとして

学校での発表やレポート提出の関係から、テーマの設定、生息現地での観察や調査の期間設定、イベント等の企画と実施といった流れが、実質二〇ヶ月という短い期間で行なわなければならない制約があり、十分な調査時間がないことから、詳細なデータ蓄積ができなくて感覚的

な立場から「多い」「少ない」のような表現になつてしまわざるを得ないところがあった。しかしながら、ニホンカモシカを見たこともなかった学生が、デスクワークとフィールドワークを繰り返すことで、ニホンカモシカとその環境を学び、実体験をもとにしたプログラムの企画と実施を成し遂げる姿には賞賛の声をあげたい。

この活動が続き、データの蓄積とプログラムの改良を重ね、より洗練されたものへと発展し、広く活用できるものなることを願っている。

(市立大町山岳博物館 副館長)



図3 沢と尾根の生活痕の違い

大町市におけるライチョウ保護 事業の展開方針について(報告)

大町市・大町市教育委員会

大町市では、これまで四十年にわたり実施してきたライチョウの低地飼育の中断を契機に「山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会」を設置し、過去の事業について見直し、今後の取り組みについての提言をいただいた。そして、「大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会」では、その提言に基づいた検討をしていただき、具体的な事業計画案をご提出いただいた(詳細は「山と博物館」第五〇巻第六・一・一二号参照)。

当市では、両委員会からの提言を重く受け止め、慎重に検討した結果、次のとおり事業方針を決定したことを報告させていただきます。

大変残念ではあるが、当市の財政状況ではランドデザインに基づいたパイロットプランの実施を当面凍結せざるを得ないと判断した。今後の事業展開は、すぐに取り掛かることとの出来る分野からとするが、一日も早い総合的な事業実施を願ひ、関係省庁などとの連携体制を強化するとともに、具体的な事業内容については、関係専門家を交えた委員会により決定したい。

今後、当市のライチョウ保護事業にご指導・鞭撻を賜りたくお願い申し上げます。

ライチョウ保護事業について

1. はじめに

大町市および大町市教育委員会では、大町

市ライチョウ保護事業計画策定委員会から、ライチョウ保護を「自然と人間との共生」という大きな潮流のなかに位置付け、大町市の「まちづくり」の総合プロジェクトとするランドデザインと、もうひとつはライチョウの将来的な危機に備えるセーフティ・ネットをいかに構築するかという学術的、技術的なパイロットプランの提言を受けた。

大町市で検討した結果、ライチョウ保護事業は本来、国等が中心となって進める事業であり、現時点では、ランドデザインを基調とした事業を当市が実施することについては、提言を尊重しながらも、すべてを直ちに展開することは困難である。また、パイロットプランの実施にあたっては当市の財政事情を考慮すれば、国・県の支援が得られるまでは、事業を見合わせざるを得ない。

2. 今後の方針について

①「ライチョウと共に生きる」を理念とした考え方を取り入れながら、山岳博物館が主体となってライチョウに関する事業を展開する。

②現地(生息域内)調査を中心に調査研究事業を進め、調査結果については教育普及活動等に活用する。

③ライチョウに関する教育活動を学校教育、社会教育、登山者への啓発という側面から展開し、情報の収集・発信に努める。

④パイロットプランについては現時点では計画の遂行を凍結し、国や県の援助体制や財政状況の動向をふまえて今後、実施の判断をする。

3. 事業展開について

当面の間、現地調査と教育普及活動の二つを大きな柱にすえて、左記の内容を中心に事業を展開する。

なお、ここに挙げた現地調査等の事項については事業の概要案であり、実施にあたっては関係者との連携をはかり、外部専門家を交えた委員会を設置し、具体的事業内容を検討・決定したい。

①現地調査

(1)生息状況調査として「生息場所」、「生息数」等。

(2)生息環境調査として「植生環境」、「ライチョウをとりまく動物環境」、「積雪環境」等。

(3)繁殖・生理学的調査等として「採餌」、「エネルギー出納」、「遺伝的特性と多様性」等。

(4)保護対策調査として「環境の変化と生息状況の変化」等。

これは現地調査の概要案であり、調査項目・方法等については、関係者との連携を含めて専門的に検討し、実施することにしたい。

②教育普及活動および啓発活動(環境教育)

(1)登山者や山小屋からのライチョウに関する情報の収集。

(2)「企画展」講演会等の開催

(3)ポスター・パンフレットなどの作成と配

布・掲示。

(4)ライチョウの生態と保護についての「副読本」映像資料」を作成。

(5)環境教育プログラムを作成し、フィールドにおける「観察会」や学校教育での「総合学習」での活用。

4. ライチョウ保護事業の展開における基本方針

①平成一八(二〇)年を第一次三カ年計画とし、平成一八年度は調査項目、調査地、調査方法等を確立するための基礎的事項の調査や情報収集を行う。

②平成一九(二〇)年度は一八年度の基礎調査をもとに、本格的調査に取り組む。

③平成二一(二二)年度以降は、成果と評価とを勘案し次のステップに進む。

④事業は、その目的と期間を明確にし、内部評価、外部評価ができる体制をとり、調査の充実を図り、成果については幅広く公開し活用する。

⑤環境省・文化庁をはじめ、研究機関・大学・支援団体との連携により、強いネットワークのもとに、調査の向上や効率の高い教育普及活動に努める。

山と博物館 第51巻 第5号

発行 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六―二二〇二二
FAX 〇二六―二二〇二二

E-mail: smpaku@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpaku/

印刷 株 奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇七―一三三九三

